

【寄稿】 奥田八二日記翻刻雑感

香川, 忠雄
元福岡県職員

<https://doi.org/10.15017/2740945>

出版情報：奥田八二日記研究会会報. 4, pp.329-329, 2020-03-31. 奥田八二日記研究会(九州大学大学文
書館内)

バージョン：

権利関係：

【寄稿】

奥田八二日記翻刻雑感

香川 忠雄

奥田日記の翻刻のお手伝いをするように大先輩から依頼をいただき、軽く引き受けてしまいましたが、生来の怠惰のせいで、ほぼ1年間でという期限をかなり過ぎ、大変ご迷惑をかけてしまいました。やはり、日記と同じで日々こつこつと積み重ねることが大切と痛感しました。さて、私が担当したのは、1985年、昭和60年の日記でした。この年は奥田県政の3年目で、私が県の職員となって5年目という時期です。もちろんヒラで、出先にいたこともあって、諸先輩方と違い、奥田知事の警咳に接する機会も全くありませんでした。でも、奥田日記の中に、旧県庁跡地問題など、当時を思い出させる多くの事案の記述があり、ああそういうこともあったなあと、懐かしく感じました。日記の翻刻を進めていって思ったのは、知事というのはたいへんな職業だということです。私的な時間はほとんどなく、そのことへの慨嘆も随所に見られます。それに加え、ご存知のとおり、県議会では少数与党の一期目の知事で、意のままにならないことが多くかつ野党側からの嫌がらせ的対応を強く感じていたようです。知事を支えていた県職員の先輩方のご苦勞も偲ばれます。しかし、そのような中で、奥田知事が書を書き、人と会い、著作し、このような日記も欠かさず記していたことに、感心させられます。この日記に登場する人たちは、今は老いまたは亡くなってしまい、当時の毀誉褒貶、甲論乙駁も今なっては遠い過去の出来事でしかないようです。しかし、奥田日記のようにその当時にこまめに書き続けられた記録は、やはり得がたいもので、奥田知事がこの日記の中でもらす述懐も例えば年金保養施設やモノレールについての危惧など、未来を予見したようなものもあります。

何はともあれ今回の翻刻は、私自身にとっては、あの頃自分は、良くも悪くもまだ若かったという感慨を抱かせてくれた楽しいものでした。

（了）